

夫一切衆生の尊敬すべき者三つあり。所謂、主・師・親これなり。又習学すべき物三つあり。所謂、儒・外・内これなり。

儒家には三皇・五帝・三王、此等を天尊と号す。諸臣の頭目、万民の橋梁なり。三皇已前は父をしらず、人皆禽獸に同ず。五帝已後は父母を弁へて孝をいたす。所謂、重華はかたくなわしき父をうやまひ、沛公は帝となって太公を拜す。武王は西伯を木像に造り、丁蘭は母の形をきざめり。此等は孝の手本なり。比干は殷の世のほろぶべきを見て、しみて帝をいさめ頭をはねらる。弘演といみし者は懿公の肝をとって、我が腹をさき、肝を入れて死しぬ。此等は忠の手本なり。尹寿は堯王の師、務成は舜王の師、太公望は文王の師、老子は孔子の師なり。此等を四聖とがうす。天尊頭をかたづけ、万民掌をあわす。此等の聖人に三墳・五典・三史等の三千余巻の書あり。其の所詮は三玄をいはず。三玄とは、一には有の玄、周公等此を立つ。二には無の玄、老子等。三には亦有亦無等、莊子が玄これなり。玄とは黒なり。父母未生已前をたづぬれば、或は元気より生ず。或は貴賤・苦楽・是非・得失等は皆自然等云云。

かくのごとく巧みに立つといえども、いまだ過去・未来を一分もしらず。玄とは、黒なり、幽なり。かるがゆへに玄という。但現在計りしれるににたり。現在にをひて仁義を制して身をまぼり、国を安んず。此に相違すれば族をほろぼし家を亡ぼす等いう。此等の賢聖の人々は聖人なりといえども、過去をしらざる事凡夫の背をみず、未来をかゞみざること盲人の前をみざるがごとし。但現在に家を治め、孝をいたし、堅く五常を行ずれば傍輩もうやまい、名も国にきこえ、賢王もこれを召して或は臣となし、或は師とたのみ、或は位をゆづり、天も来たって守りつかう。所謂周の武王には五老きたりつかえ、後漢の光武には二十八宿来たって二十八将となりし此なり。而りといえども、過去・未来をしらざれば父母・主君・師匠の後世をもたすけず、不知恩の者なり。まことの賢聖にあらず。孔子が此の土に賢聖なし、西方に仏図という者あり、此聖人なりといひて、外典を仏法の初門となせしこれなり。礼楽等を教へて、内典わたらば戒定慧をしりやすからせんがため、王臣を教へて尊卑をさだめ、父母を教へて孝の高きことをしらしめ、師匠を教へて帰依をしらしむ。妙楽大師云はく「仏教の流化実に茲に頼る。礼楽前に驅せて真道後に啓く」等云云。天台云はく「金光明経に云はく、一切世間所有の善論皆此の経に因る。若し深く世法を識れば即ち是仏法なり」等云云。止観に云はく「我れ三聖を遣はして彼の真丹を化す」等云云。弘決に云はく「清浄法行経に云はく、月光菩薩彼に顔回と称し、光浄菩薩彼に仲尼と称し、迦葉菩薩彼に老子と称す。天竺より此の震旦を指して彼と為す」等云云。

二には月氏の外道、三目八臂の摩醯首羅天・毘紐天、此の二天をば一切衆生の慈父

悲母、又天尊主君と号す。迦毘羅・漚樓僧佉・勒娑婆、此の三人をば三仙となづく。此等は仏前八百年、已前已後の仙人なり。此の三仙の所説を四韋陀と号す、六万蔵あり。乃至仏出世に当たって、六師外道、此の外経を習伝して五天竺の王の師となる。支流九十五六等にもなれり。一々に流々多くして、我慢の幢高きこと非想天にもすぎ、執心の心の堅きこと金石にも超えたり。其の見の深きこと巧みなさま、儒家にはにるべくもなし。或は過去二生・三生・乃至七生・八万劫を照見し、又兼ねて未来八万劫をしる。其の所説の法門の極理は、或は因中有果、或は因中無果、或は因中亦有果亦無果等云云。此外道の極理なり。所謂善き外道は五戒・十善戒等を持ちて、有漏の禅定を修し、上、色・無色をきわめ、上界を涅槃と立て屈歩虫のごとくせめのぼれども、非想天より返って三悪道に墮つ。一人として天に留まるものなし。而れども天を極むる者は永くかへらずとをもえり。各々自師の義をうけて堅く執するゆへに、或は冬寒に一日に三度恒河に浴し、或は髪をぬき、或は巖に身をなげ、或は身を火にあぶり、或は五処をやく、或は裸形、或は馬を多く殺せば福をう、或は草木をやき、或は一切の木を礼す。此等の邪義其の数をしらず。師を恭敬する事諸天の帝釈をうやまい、諸臣の皇帝を拝するがごとし。しかれども外道の法九十五種、善悪につけて一人も生死をはなれず。善師につかへては二生三生等に悪道に墮ち、悪師につかへては順次生に悪道に墮つ。外道の所説は内道に入る即ち最要なり。或外道云はく「千年已後仏出世す」等云云。或外道云はく「百年已後仏出世す」等云云。大涅槃経に云はく「一切世間の外道の経書は皆是仏説にして外道の説に非ず」等云云。法華経に云はく「衆に三毒有りと示し又邪見の相を現ず、我が弟子是くの如く方便して衆生を度す」等云云。

三には大覺世尊、此一切衆生の大導師・大眼目・大橋梁・大船師・大福田等なり。外典外道の四聖三仙、其の名は聖なりといえども実には三惑未断の凡夫、其の名は賢なりといえども実に因果を弁へざる事嬰兒のごとし。彼を船として生死の大海をわたるべしや。彼を橋として六道の巷こえがたし。我が大師は変易猶わたり給へり。況んや分段の生死をや。元品の無明の根本猶かたぶけ給へり。況んや見思枝葉の麤惑をや。此の仏陀は三十成道より八十御入滅にいたるまで、五十年が間一代の聖教を説き給へり。一字一句皆真言なり。一文一偈妄語にあらず。外典外道の中の聖賢の言すら、いうことあやまりなし。事と心と相符へり。況んや仏陀は無量曠劫よりの不妄語の人、されば一代五十余年の説教は外典外道に対すれば大乘なり。大人の実語なるべし。初成道の初めより泥洹の夕べにいたるまで、説くところの所説皆真実なり。

但し仏教に入つて五十余年の経々、八万法蔵を勘へたるに、小乗あり大乘あり、権経あり実経あり、顕教・密経、軟語・麤語、実語・妄語、正見・邪見等の種々の差別あり。但し法華経計り教主釈尊の正言なり。三世十方の諸仏の真言なり。大覺世尊は四十余年の年限を指して、其の内の恒河の諸経を未顕真実、八年の法華は要当説真実と定め給ひしかば、多宝仏大地より出現して皆是真実と証明す。分身の諸仏来集して長舌を梵天

に付く。此の言^{ことば}赫々たり、明々たり。晴天の日よりもあきらかに、夜中の満月のごとし。仰いで信ぜよ、伏して懐^{おも}ふべし。

但し此の經に二箇の大事あり。俱舍宗^{くしゃ}・成実宗^{じょうじつ}・律宗^{りつ}・法相宗^{ほっそう}・三論宗^{さんろん}等は名をもしらず。華嚴宗^{けごん}と真言宗^{ひそ}との二宗は偷かに盗んで自宗の骨目とせり。一念三千の法門は但法華經の本門壽量品の文の底にしづめたり。竜樹天親は知って、しかもいまだひろいいださず、但我が天台智者のみこれをい^懐だけり。

一念三千は十界互具よりことはじまれり。法相と三論とは八界を立て、十界をしらず。況んや互具をしるべしや。俱舍^{くしゃ}・成実^{じょうじつ}・律宗^{りつ}等は阿含經によれり。六界を明らかに四界をしらず。十方唯一仏と云って、一方有仏だにもあかさず。一切有情悉有仏性とこそとかざらめ。一人の仏性猶ゆるさず。而るを律宗・成実宗等の十方有仏・有仏性など申すは仏滅後の人師等の大乘の義を自宗に盗み入れたるなるべし。例せば外典外道等は仏前の外道は執見あさし。仏後の外道は仏教をきゝみて自宗の非をしり、巧みの心出現して仏教を盗み取り、自宗に入れて邪見もつともふかし。附仏教、学仏法成等これなり。外典も又々かくのごとし。漢土に仏法いまだわたらざりし時の儒家・道家は、いういうとして嬰兒のごとくはかなかりしが、後漢已後に釈教わたりて対論の後、釈教^{ようや}漸く流布する程に、釈教の僧侶破戒のゆへに、或は還俗して家にかへり、或は俗に心をあはせ、儒道の内に釈教を盗み入れたり。止観の第五に云はく「今の世に多く悪魔の比丘有って、戒を退き家に還り、駟策を懼畏して更に道士に越濟す。復名利を邀めて莊老を誇談し、仏法の義を以て偷んで邪典に安き、高を押し下きに就け、尊きを推いて卑しきに入れ、概して平等ならしむ」云云。弘に云はく「比丘の身と作って仏法を破滅す。若しは戒を退き家に還るは衛の元嵩等が如し。即ち在家の身を以て仏法を破壊す。此の人正教を偷竊して邪典に助添す。高きを押し等とは、道士の心を以て二教の概と為し、邪正をして等しからしむ。義是の理無し。曾て仏法に入って正を偷んで邪を助け、八万・十二の高きを押し五千・二篇の下きに就け、用て彼の典の邪鄙の教へを釈するを推尊入卑と名づく」等云云。此の釈を見るべし。次上の心なり。

仏教又かくのごとし。後漢の永平に漢土に仏法わたりて、邪典やぶれて内典立つ。内典に南三北七の異執^{いしじゅう}をこりて蘭菊なりしかども、陳隋の智者大師にうちやぶられて、仏法^{ふた}二び群類をすくう。其の後法相宗・真言宗^{てんじく}天竺よりわたり、華嚴宗又出来せり。此等の宗々の中に法相宗は一向天台宗に敵を成す宗、法門水火なり。しかれども玄奘三蔵・慈恩大師、委細に天台の御釈を見ける程に、自宗の邪見ひるがへるかのゆへに、自宗をばすてねども其の心天台に帰伏すと見へたり。華嚴宗と真言宗とは本は権經権宗なり。善無畏三蔵・金剛智三蔵、天台の一念三千の義を盗みとって自宗の肝心とし、其の上に印と真言とを加へて超過の心ををこす。其の子細をしらぬ学者等は、天竺より大日經に一念三千の法門ありけりとうちをもう。華嚴宗は澄觀が時、華嚴經の心如工画師の文に天台の一念三千の法門を偷^{ぬす}み入れたり、人これをしらず。

日本我が朝には華嚴等の六宗、天台真言已前にわたりけり。華嚴・三論・法相、^{じょうろん} 諍論水火なりけり。伝教大師此の国にいでて、六宗の邪見をやぶるのみならず、真言宗が天台の法華經の理を盗み取って自宗の極とする事あらわれをはんぬ。伝教大師宗々の人師の異執^{いしゅう}をすて、専ら經文を前として責めさせ給ひしかば、六宗の高徳八人・十二人・十四人・三百余人並びに弘法大師等せめをとされて、日本国一人もなく天台宗に帰伏し、南都・東寺・日本一州の山寺、皆叡山^{えいざん}の末寺となりぬ。又漢土の諸宗の元祖の天台に帰伏して謗法の失をまぬかれたる事もあらわれぬ。又其の後やうやく世をとろへ人の智あさくなるほどに、天台の深義は習ひうしないぬ。他宗の執心は強盛になるほどに、やうやく六宗七宗に天台宗をとされて、よわりゆくかのゆへに、結句は六宗七宗等にもをよばず。いうにかいなき禅宗・浄土宗にをとされて、始めは檀那やうやくかの邪宗にうつる。結句は天台宗の碩徳^{せきとく}と仰がる、人々みなをちゆきて彼の邪宗をたすく。さるほどに六宗八宗の田畠所領みなたを^たをされ、正法失せはてぬ。天照太神・正八幡・山王等諸の守護の諸大善神も法味をなめざるか、國中を去り給ふかの故に、悪鬼便り^{たよ}を得て国すでに破れなんとす。

此に予愚見をもって前四十余年と後八年との相違をかんがへみるに、其の相違多しといえども、先づ世間の学者もゆるし、我が身にもさもやとうちをぼうる事は二乗^{さぶつ}作仏・久遠実成^{くおんじつじょう}なるべし。

法華經の現文を拝見するに、舍利弗は華光如来、迦葉は光明如来、須菩提は名相如来、迦旃延は閻浮那提金光如来、目連は多摩羅跋栴檀香仏、富楼那は法明如来、阿難は山海慧自在通王仏、羅睺羅は蹈七宝華如来、五百・七百は普明如来、学無学二千人は宝相如来、摩訶波闍波提比丘尼・耶輸陀羅比丘尼等は一切衆生喜見如来・具足千万光相如来等なり。此等の人々は法華經を拝見したてまつるには尊きやうなれども、爾前の經々を披見の時^興はけをさむる事どもをほし。其の故は仏世尊は実語の人なり、故に聖人・大人と号す。外典・外道の中の賢人・聖人・天仙など申すは実語につけたる名なるべし。此等の人々に勝れて第一なる故に世尊をば大人とは申すぞかし。此の大人^{ただいちだいじ}「唯一大事の因縁を以ての故に世に出現したまふ」となのらせ給ひて「未だ真実を顯はさず」「世尊は法久しくして後要^{かなら}ず当に真実を説くべし」「正直に方便を捨て」等云云。多宝仏証明を加へ、分身舌を出だす等は、舍利弗が未来の華光如来、迦葉が光明如来等の説をば誰の^{ぎもつ}人が疑網をなすべき。

而れども爾前の諸經も又仏陀の実語なり。大方広仏華嚴經に云はく「如来の智慧大薬王樹は、唯二処に於て生長の利益を為作すこと能はず。所謂二乗の無為広大の深坑に墮つると、及び善根^{やぶ}を壊る非器の衆生の大邪見貪愛の水に溺るゝとなり」等云云。此の經文の心は雪山に大樹あり、無尽根となづく。此を大薬王樹と号す。閻浮提の諸木の中の大王なり。此の木の高さは十六万八千由旬なり。一閻浮提の一切の草木は此の木の根ざし枝葉^{けか}華果の次第に随つて、華果^成なるなるべし。此の木をば仏の仏性に譬へたり。一切

衆生をば一切の草木にたとう。但し此の大樹は火坑と水輪の中に生長せず。二乗の心中をば火坑にたとえ、一闍提人の心中をば水輪にたとえたり。此の二類は永く仏になるべからずと申す経文なり。

大集經に云はく「二種の人有り。必ず死して活きず、畢竟して恩を知り恩を報ずること能はず。一には声聞、二には縁覺なり。譬へば人有りて深坑に墜墮せん、是の人自ら利し他を利すること能はざるが如く、声聞縁覺も亦復是の如し。解脱の坑に墜ちて自ら利し及以他を利すること能はず」等云云。外典三千余卷の所詮に二つあり。所謂孝と忠となり。忠も又孝の家よりいでたり。孝と申すは高なり。天高けれども孝よりも高からず。又孝とは厚なり。地あつけれども孝よりは厚からず。聖賢の二類は孝の家よりいでたり。何に況んや仏法を学せん人、知恩報恩なかるべしや。仏弟子は必ず四恩をして知恩報恩をいたすべし。其の上舎利弗・迦葉等の二乗は二百五十戒・三千の威儀持整して、味・淨・無漏の三靜慮、阿含經をきわめ、三界の見思を尽くせり。知恩報恩の人の手本なるべし。然るを不知恩の人なりと世尊定め給ひぬ。其の故は父母の家を出でて出家の身となるは必ず父母をすくはんがためなり。二乗は自身は解脱とをもえども、利他の行かけぬ。設ひ分々の利他ありといえども、父母等を永不成仏の道に入るれば、かへりて不知恩の者となる。

維摩經に云はく「維摩詰又文殊師利に問ふ、何等をか如来の種と為す。答へて曰く、一切塵勞の疇は如来の種と為る。五無間を以て具すと雖も猶能く此の大道意を發こす」等云云。又云はく「譬へば族姓の子、高原陸土には青蓮芙蓉衡華を生ぜず、卑湿汚田に乃ち此の華を生ずるが如し」等云云。又云はく「已に阿羅漢を得て眞と為る者は、終に復道意を起こして仏法を具すること能はざるなり。根敗の土其の五樂に於て復利すること能はざるが如し」等云云。文の心は貪・瞋・癡の三毒は仏の種となるべし、殺父等の五逆罪は仏種となるべし、高原の陸土には青蓮華生ずべし、二乗は仏になるべからず。いう心は、二乗の諸善と凡夫の悪と相對するに、凡夫の悪は仏になるとも、二乗の善は仏にならじとなり。諸の小乘經には、悪をいましめ善をほむ。此の經には二乗の善をそしり、凡夫の悪をほめたり。かへって仏經ともおぼへず、外道の法門のやうなれども、詮ずるところは、二乗の永不成仏をつよく定めさせ給ふにや。

方等陀羅尼經に云はく「文殊、舍利弗に語らく、猶枯樹の如き更に華を生ずるや不や。亦山水の如き本処に還るや不や。折石還つて合ふや不や。焦種芽を生ずるや不や。舍利弗の言はく、不なり。文殊の言はく、若し得べからずんば云何ぞ、我に菩提の記を得んやと問うて、心に歡喜を生ずるや」等云云。文の心は、枯れたる木、華さかず、山水、山にかへらず、破れたる石あはず、いれる種をいず、二乗またかくのごとし。仏種をいれり等となん。

大品般若經に云はく「諸の天子、今未だ三菩提心を發こさざる者は應に發こすべし。若し声聞の正位に入れば是の人能く三菩提心を發こさざるなり。何を以ての故に。生死

の為に障隔を作す故」等云云。文の心は二乗は菩提心ををこさざれば我随喜せじ、諸天は菩提心ををこせば我随喜せん。

首楞嚴經に云はく「五逆罪の人、是の首楞嚴三昧を聞いて、阿耨菩提心を発こせば、還つて仏と作るを得。世尊、漏尽の阿羅漢は、猶破器の如く、永く是の三昧を受くるに堪忍せず」等云云。

浄名經に云はく「其れ汝に施す者は福田と名づけず。汝を供養せん者は三悪道に墮す」等云云。文の心は迦葉・舍利弗等の聖僧を供養せん人天等は、必ず三悪道に墮つべしとなり。此等の聖僧は、仏陀を除きたてまつりては人天の眼目、一切衆生の導師とこそをもひしに、幾許の人天大会の中にして、かう度々仰せられしは、本意なかりし事なり。只詮ずるところは、我が御弟子を責めころさんとにや。此の外、牛驢の二乳、瓦器金器、螢火日光等の無量の譬へをとって、二乗を呵嘖せさせ給ひき。一言二言ならず、一日二日ならず、一月二月ならず、一年二年ならず、一經二經ならず、四十余年が間無量無辺の経々に、無量の大会の諸人に対して、一言もゆるし給ふ事もなくそしり給ひしかば、世尊の不妄語なり。我もしる人もしる、天もしる地もしる。一人二人ならず百千万人、三界の諸天・竜神・阿修羅・五天・四洲・六欲・色・無色・十方世界より雲集せる人天・二乗・大菩薩等、皆これをする、又皆これをきく。各々国々へ還つて、娑婆世界の釈尊の説法を彼々の国々にして一々にかたるに、十方無辺の世界の一切衆生、一人もなく、迦葉・舍利弗等は永不成仏の者、供養してはあしかりぬべしとしりぬ。

而るを後八年の法華經に忽ちに悔い還して、二乗作仏すべしと、仏陀とかせ給はんに、人天大会、信仰をなすべしや。用ゆべからざる上、先後の経々に疑網をなし、五十余年の説教皆虚妄の説となりなん。されば四十余年未顕眞実等の經文はあらませしが、天魔の仏陀と現じて、後八年の経をばとかせ給ふかと疑網するところに、げにげにしげに劫国名号と申して、二乗成仏の国をさだめ、劫をしるし、所化の弟子などを定めさせ給へば、教主釈尊の御語すでに二言になりぬ。自語相違と申すはこれなり。外道が仏陀を大妄語の者と咲ひしことこれなり。

人天大会けをさめてありし程に、爾の時に東方宝浄世界の多宝如来、高さ五百由旬、広さ二百五十由旬の大七宝塔に乗じて、教主釈尊の人天大会に自語相違をせめられて、とのべかうのべ、さまざまに宣べさせ給ひしかども、不審猶はるべしとも見へず、もてあつかいてをはせし時、仏前に大地より涌現して虚空にのぼり給ふ。例せば、暗夜に満月の東山より出づるがごとし。七宝の塔大虚にかゝらせ給ひて、大地にもつかず、大虚にも付かせ給わず。天中に懸かりて、宝塔の中より梵音声を出だして証明して云はく「爾の時に宝塔の中より大音声を出だして歎めて言はく、善きかな善きかな、釈迦牟尼世尊、能く平等大慧・教菩薩法・仏所護念の妙法華經を以て、大衆の為に説きたまふ。是くの如し是くの如し。釈迦牟尼世尊の所説の如きは皆是眞実なり」等云云。又云はく「爾の時に世尊、文殊師利等の、無量百千万億・旧住娑婆世界の菩薩、乃至人非人等

一切の衆の前に於て、大神力を現じたまふ。広長舌を出だして、^{かみほん せ}上梵世に至らしめ、一切の毛孔より、乃至十方世界、^{もろもろ}衆の宝樹の下の、師子の座の上の諸仏も、亦復是くの如く、広長舌を出だし無量の光を放ちたまふ」等云云。又云はく「十方より来たりたまへる諸の分身の仏をして、^{おのおの}各本土に還らしめ、乃至多宝仏の塔、^{かえ}還つて故の如くしたまふべし」等云云。

大覺世尊初成道の時、諸仏十方に現じて釈尊を慰諭し給ふ上、諸の大菩薩を遣はしき。般若經の御時は、釈尊長舌を三千にをほひ、千仏十方に現じ給ふ。金光明經には、四方の四仏現ぜり。阿弥陀經には六方の諸仏、舌を三千にをう。大集經には、十方の諸仏菩薩大宝坊にあつまれり。此等を法華經に引き合はせてかんがうるに、^{こうせき}黄石と^{おうこん}黄金と、^{はくひょう}白雲と^{ごんきょう}白山と、^{えいげん}白氷と^{みょうもく}銀鏡と、^{みょうもく}黒色と青色とをば、^{えいげん}翳眼の者・^{みょうもく}眇目の者・^{もく}一眼の者・^{もく}邪眼の者は見たがへつべし。華嚴經には、先後の經なければ仏語相違なし。なににつけてか大疑いで来べき。大集經・大品經・金光明經・阿弥陀經等は、諸小乘經の二乗を^{だん か}弾呵せんがために十方に浄土をとく、凡夫・菩薩を^{ごん ぼ}欣慕せしめ、二乗を^煩わづらわす。小乘經と諸大乘經と一分の相違あるゆへに、或は十方に仏現じ給ひ、或は十方より大菩薩をつかわし、或は十方世界にも此の經をとくよしをしめし、或は十方より諸仏あつまり給ふ。或は釈尊、舌を三千に^覆おおい、或は諸仏の舌を^出いだすよしをとかせ給ふ。此ひとえに諸小乘經の十方世界^{ゆい とう}唯一仏ととかせ給ひしをもひをやぶるなるべし。法華經のごとくに先後の諸大乘經と相違出来して、^{しゃり ぼつ}舍利弗等の諸の声聞・大菩薩・^{しやう}人天等に^{ひ ま さ ぶつ}將非魔作仏とをもわれさせ給ふ大事にはあらず。而るを華嚴・法相・三論・真言・念仏等の^{えいげん}翳眼の輩、彼々の經々と法華經とは同じとうちをもへるはつたなき眼なるべし。

但在世は四十余年をすて法華經につき候ものもやありけん。仏滅後に此の經文を開見して信受せんことかたかるべし。先づ一には、^{に ぜん}爾前の經々は多言なり、法華經は一言なり。爾前の經々は多經なり、此の經は一經なり。彼々の經々は多年なり、此の經は八年なり。仏は大妄語の人、永く信ずべからず。不信の上に信を立てば、爾前の經々は信ずる事もありなん。法華經は永く信ずべからず。当世も法華經をば皆信じたるやうなれども、法華經にてはなきなり。其の故は法華經と大日經と、法華經と華嚴經と、法華經と阿弥陀經と一なるやうをとく人をば悦んで帰依し、別々なるなど申す人をば用ひず。たとい用ゆれども本意なき事とをもへり。

日蓮云はく、日本に仏法わたりてすでに七百余年、^{ただ}但伝教大師一人計り法華經をよめりと申すをば、諸人これを用ひず。但し法華經に云はく「若し須弥を接つて他方の無数の仏土に^な擲げ置かんも、亦未だ^{かた}難しと為ず。乃至若し仏の滅後に、惡世の中に於て能く此の經を説かん、是則ち^{かた}難しとす」等云云。日蓮が強義經文には^{ふ ごと}普合せり。法華經の流通たる涅槃經に、末代濁世に謗法の者は十方の地のごとし。正法の者は^{そう じやう}爪上の土のごとしととかれて候は、いかんがし候べき。日本の諸人は爪上の土か、日蓮は十方の土か、よくよく^{し ゆい}思惟あるべし。賢王の世には道理かつべし。愚主の世に非道先をすべし。聖人

の世に法華經の実義顯はるべし等と心うべし。此の法門は迹門と爾前と相對して、爾前の強きやうにをばゆ。もし爾前^強つよるならば、舍利弗等の諸の二乗^よは永不成仏の者なるべし。いかながなげかせ給ふらん。

二には教主釈尊は住劫第九の滅、人壽百歳の時、師子^{し しきょうおう} 頰王には孫、淨飯王には嫡子、童子^{しつ たたいし}悉達太子一切義成就菩薩これなり。御年十九の御出家、三十成道の世尊、始め寂滅^{じやくめつ}道場にして、実報華王^{け おう}の儀式を示現して、十玄六相・法界円融・頓極微妙^{えんゆう とんごくみ みょう}の大法を説き給ひ、十方の諸仏も顯現し、一切の菩薩も雲集^{うんじゅう}せり。土といひ、機といひ、諸仏といひ、始めといひ、何事につけてか大法を秘し給ふべき。されば經文には「顯現自在^{ざいりきえんぜつえんまんぎょう}力演説円満經」等云云。一部六十巻は一字一点もなく円満經なり。譬へば如意宝珠は一珠も無量珠も共に同じ。一珠も万宝を尽くして雨らし、万珠も万宝を尽くすがごとし。華嚴經は一字も万字も但^{ただ}同事なるべし。「心仏及衆生」の文は華嚴宗の肝心なるのみならず、法相・三論・真言・天台の肝要とこそ申し候へ。此等程いみじき御經に何事をか隠すべき。なれども二乗・闍提不成仏^{せんたい}ととかれしは、珠のきずとみゆる上、三処まで始成正覺となのらせ給ひて、久遠実成^{く おんじつじょう}の壽量品を説きかくさせ給ひき。珠^わの破れたると、月に雲のかゝれると、日の蝕したるがごとし。不思議なりしことなり。阿含・方等・般若・大日經等は仏説なればいみじき事なれども、華嚴經^対にたいすればいうにかいなし。彼の經に秘せんこと此等の經々にとかるべからず。されば雜阿含經^{あ こん}に云はく「初め成道」等云云。大集經に云はく「如来成道始め十六年」等云云。淨名經^{じょうみょうきょう}に云はく「始め仏樹に坐して力めて魔を降す」等云云。大日經に云はく「我昔道場に坐して」等云云。仁王般若經に云はく「二十九年」等云云。

此等は言ふにたらず。只耳目をををどろかす事は、無量義經に、華嚴經の唯心法界、方等・般若經の海印三昧・混同無二等^{こんどうむ に}の大法をかきあげて、或は未顯真實、或は歴劫修行等下す程の御經に「我先に道場菩提樹の下に端坐すること六年、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり」と初成道の華嚴經の「始成」の文に同ぜられし、不思議と打ち思うところに、此は法華經の序分なれば正宗の事をばいわずもあるべし。法華經の正宗、略開三、広開三の御時「唯仏与仏乃能究尽諸法実相」等、「世尊法久後」等、「正直捨方便」等。多宝仏、迹門八品を指して「皆是真實」と証明せられしに、何事をか隠すべきなれども、久遠壽量をば秘せさせ給ひて、「我始め道場に坐し樹を觀じて亦經行す」等云云。最大一の大不思議なり。

されば弥勒菩薩、涌出品に四十余年の未見今見の大菩薩を、仏「爾して乃ち之を教化して初めて道心を発こさしむ」等ととかせ給ひしを疑って云はく「如来太子たりし時、釈の宮を出でて伽耶城^{が やじょう}を去ること遠からず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たまへり。是より已來、始めて四十余年を過ぎたり。世尊、云何ぞ此の少時に於て、大いに仏事を作したまへる」等云云。教主釈尊此等の疑ひを晴らさんがために壽量品をとかんとして、爾前迹門^{所 聞}のきゝを挙げて云はく「一切世間の天人及び阿修羅は

皆、今の釈迦牟尼仏、釈氏の宮を出でて伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を得たまへりと謂へり」等云云。正しく此の疑ひに答へて云はく「然るに善男子、我実に成仏してより已来、無量無辺百千万億那由他劫なり」等云云。

華嚴乃至般若・大日經等は二乗作仏を隠すのみならず、久遠実成を説きかくさせ給へり。此等の経々に二つの失あり。一には「行布を存するが故に仍未だ権を開せず」と、迹門の一念三千をかくせり。二には「始成を言ふが故に曾て未だ迹を発せず」と、本門の久遠をかくせり。此等の二つの大法は一代の鋼骨、一切經の心髓なり。迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説いて爾前二種の失一つを脱れたり。しかりといえどもいまだ発迹顕本せざれば、まことの一念三千もあらわれず、二乗作仏も定まらず。水中の月を見るがごとし。根なし草の波の上に浮かべるににたり。本門にいたりて、始成正覺をやぶれば、四教の果をやぶる。四教の果をやぶれば、四教の因やぶれぬ。爾前迹門の十界の因果を打ちやぶって、本門の十界の因果をとき顯はす。此即ち本因本果の法門なり。九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に備はりて、眞の十界互具・百界千如・一念三千なるべし。

かうてかへりみれば、華嚴經の台上十方、阿含經の小釈迦、方等・般若の、金光明經の、阿彌陀經の、大日經等の權仏等は、此の寿量の仏の天月、しばらく影を大小の器にして浮かべ給ふを、諸宗の学者等、近くは自宗に迷ひ、遠くは法華經の寿量品をしらず。水中の月に実月の想ひをなし、或は入って取らんとをもひ、或は繩をつけてつなぎとゞめんとす。天台云はく「天月を識らず、但池月を觀ず」等云云。

日蓮案じて云はく、二乗作仏すら猶爾前づよにをばゆ。久遠実成は又になるべくもなき爾前づりなり。其の故は爾前・法華相對するに猶爾前こわき上、爾前のみならず、迹門十四品も一向に爾前に同ず。本門十四品も涌出・寿量の二品を除きては皆始成を存せり。雙林最後の大般涅槃經四十卷、其の外の法華前後の諸大乘經に一字一句もなく、法身の無始無終はとけども、応身・報身の顕本はとかれず。いかんが広博の爾前・本迹・涅槃等の諸大乘經をばすて、但涌出・寿量の二品には付くべき。

されば法相宗と申す宗は、西天の仏滅後九百年に無著菩薩と申す大論師有しき。夜は都率の内院にのぼり、彌勒菩薩に對面して一代聖教の不審をひらき、昼は阿輸舍国にして法相の法門を弘め給ふ。彼の御弟子は世親・護法・難陀・戒賢等の大論師なり。戒日大王頭をかたづけ、五天幢を倒して此に歸依す。尸那国の玄奘三蔵月氏にいたりて十七年、印度百三十余の国々を見き、諸宗をばふりすて、此の宗を漢土にわたして太宗皇帝と申す賢王にさづけ給ひ、肪・尚・光・基を弟子として、大慈恩寺並びに三百六十余箇国に弘め給ふ。日本国には人王三十七代孝徳天皇の御宇に、道慈・道昭等ならいわたして山階寺にあがめ給へり、三国第一の宗なるべし。此の宗の云はく、始め華嚴經より終はり法華・涅槃經にいたるまで、無性有情と決定性の二乗は永く仏になるべからず。仏語に二言なし。一度永不成仏と定め給ひぬる上は、日月は地に落ち給ふと

も、大地は反覆すとも、永く変改有るべからず。されば法華經・涅槃經の中にも、爾前の經々に嫌ひし、無性有情・決定性を正しくつuisaして成仏すとはとかれず。まづ眼を閉じて案ぜよ。法華經・涅槃經に、決定性・無性有情、正しく仏になるならば、無著・世親ほどの大論師、玄奘・慈恩ほどの三蔵人師、これをみざるべしや。此をのせざるべしや。これを信じて伝へざるべしや。弥勒菩薩に問ひたてまつらざるべしや。汝は法華經の文に依るやうなれども、天台・妙楽・伝教の僻見を信受して、其の見をもって經文を見るゆえに、爾前に法華經は水火なりと見るなり。

華嚴宗と真言宗は、法相・三論にはにるべくもなき超過の宗なり。二乗作仏・久遠実成は法華經に限らず、華嚴經・大日經に分明なり。華嚴宗の杜順・智儼・法蔵・澄観、真言宗の善無畏・金剛智・不空等は、天台・伝教にはにるべくもなき高位の人、其の上善無畏等は日如来より糸みだれざる相承あり。此等の権化の人、いかでか誤りあるべき。随って華嚴經には「或は釈迦仏道を成じ已はって、不可思議劫を経るを見る」等云云。大日經には「我は一切の本初なり」等云云。何ぞ但久遠実成、寿量品に限らん。譬へば、井底の蝦が大海を見ず、山左が洛中をしらざるがごとし。汝但寿量の一品を見て、華嚴・大日經等の諸經をしらざるか。其の上月氏・尸那・新羅・百濟等にも一同に二乗作仏・久遠実成は法華經に限るといふか。

されば八箇年の經は四十余年の經々には相違せりというとも、先判後判の中には後判につくべしというとも、猶爾前づりにこそおぼうれ。又但在世計りならばさもあるべきに、滅後に居せる論師人師、多くは爾前づりにこそ候へ。かう法華經は信じがたき上、世もやうやく末になれば、聖賢はやうやくかくれ、迷者はやうやく多し。世間の浅き事すら猶あやまりやすし。何に況んや出世の深法誤りなかるべしや。犢子・方廣が聡敏なりし、猶大小乗經にあやまてり。無垢・摩沓が利根なりし、権実二教を弁へず。正法一千年の内は在世も近く、月氏の内なりし、すでにかくのごとし。況んや尸那・日本等は、国もへだて音もかはれり。人の根も鈍なり。寿命も日あさし。貪瞋癡も倍增せり。仏、世を去ってとし久し。仏経みなあやまれり。誰の智解か直かるべき。仏、涅槃經に記して云はく「末法には正法の者は爪上の土、謗法の者は十方の土」と見へぬ。法滅尽經に云はく「謗法の者は恒河沙、正法の者は一二の小石」と記しをき給ふ。千年・五百年に一人なんども正法の者ありがたからん。世間の罪に依って悪道に墮つる者は爪上の土、仏法によって悪道に墮つる者は十方の土。俗より僧、女より尼多く悪道に墮つべし。

此に日蓮案じて云はく、世すでに末代に入って二百余年、辺土に生をうく。其の上下賤、其の上、貧道の身なり。輪廻六趣の間には人天の大王と生まれて、万民をなびかす事、大風の小木の枝を吹くがごとくせし時も仏にならず。大小乗經の外凡内凡の大菩薩と修しあがり、一劫二劫無量劫を経て菩薩の行を立て、すでに不退に入りぬべかりし時も、強盛の悪縁におとされて仏にもならず。しらず大通結縁の第三類の在世をもれたるか、

くおん
久遠五百の退転して今に来たるか。法華經を行ぜし程に、世間の悪縁・王難・外道の難
・小乗經の難などは忍びし程に、権大乘・実大乘經を極めたるやうなる道^{どうしやく}・善導^善
・法然等がごとくなる悪魔の身に入りたる者、法華經をつよくほめあげ、機をあながち^強
に下し、理^{りじんげみ}深解微と立て、未^み有一人得者千中無一等とすかしゝものに、無量生が間、恒^{ごう}
河沙^{がしや}の度すかされて権經に墮ちぬ。権經より小乗經に墮ちぬ。外道外典に墮ちぬ。結句^{けっく}
は悪道に墮ちけりと深く此をしれり。日本国に此をしれる者、但日蓮一人なり。これを
一言も申し出だすならば父母・兄弟・師匠に国主の王難必ず来たるべし。いわずば慈悲
なきににたりと思惟^{しゆい}するに、法華經・涅槃經等に此の二辺を合はせ見るに、いわずば今
生は事なくとも、後生は必ず無間地獄に墮つべし。いうならば三障四魔必ず競ひ起こる
べしとしりぬ。二辺の中にはいうべし。王難等出来の時は、退転すべくば一度に思ひ止
むべしと且^{しばら}くやすらいし程に、宝塔品の六難九易^いこれなり。我等程の小力の者、須弥山^{しゆみせん}
はなくとも、我等程の無通の者、乾草^{かれくさ}を負ふて劫火にはやけずとも、我等程の無智の者、
恒沙^{ごうしや}の經々をばよみをぼうとも、法華經は一句一偈も末代に持ちがたと、とかるゝは
これなるべし。今度、強盛^{ぼだいしん}の菩提心ををこして退転せじと願じぬ。

既に二十余年が間此の法門を申すに、日々月々年々に難かさなる。少々の難はかずし
らず、大事の難四度なり。二度はしばらくをく、王難すでに二度にをよぶ。今度はすで
に我が身命に及ぶ。其上、弟子といひ檀那^{だんな}といひ、わづかの聴聞の俗人など来たっ
て重科に行なはる。謀反^{むほん}などの者のごとし。法華經の第四に云はく「而も此の經は如
来の現在すら猶怨嫉多し、況んや滅度の後をや」等云云。第二に云はく「經を讀誦し書
持すること有らん者を見て、輕賤憎嫉して、結恨を懐かん」等云云。第五に云はく「一
切世間、怨多くして信じ難し」等云云。又云はく「諸の無智の人の悪口罵詈する有らん」
等。又云はく「国王大臣婆羅門居士に向かつて、誹謗して我が悪を説いて、是れ邪見の
人なりと謂はん」と。又云はく「数々擯出せられん」等云云。又云はく「杖木瓦石もて^{がしやく}
之を打擲せん」等云云。涅槃經に云はく「爾の時に多く無量の外道有って、和合して
共に摩訶陀国の王、阿闍世の所に往く 今は唯、一の大悪人有り、瞿曇沙門なり 一
切世間の悪人、利養の為の故に、其の所に往集して眷屬と為って、能く善を修せず。呪
術の力の故に、迦葉及び舍利弗・目犍連を調伏す」等云云。天台云はく「何に況んや
未来をや。理、化し難きに在るなり」等云云。妙楽云はく「障り未だ除かざる者を怨と
為し、聞くことを喜ばざる者を嫉と名づく」等云云。南三北七の十師、漢土無量の学者、
天台を怨敵とす。得一云はく「拙いかな智公、汝は是誰が弟子ぞ。三寸に足らざる舌
根を以て覆面舌の所説を謗する」等云云。東春に云はく「問ふ、在世の時許多の怨嫉あ
り。仏滅度の後、此の經を説く時、何が故ぞ亦留難多きや。答へて云はく、俗に良薬口
に苦しと言ふが如く、此の經は五乘の異執を廢して、一極の玄宗を立つるが故に、凡
を斥け聖を呵し、大を排ひ小を破り、天魔を銘じて毒虫と為し、外道を説いて悪鬼と
為し、執小を貶つて貧賤と為し、菩薩を挫めて新学と為す。故に天魔は聞くを悪み、

外道は耳に逆らひ、二乗は驚怪し、菩薩は怯行す。此くの如きの徒、悉く留難を為す。多怨嫉の言豈虚しからんや」等云云。顕戒論に云はく「僧統奏して曰く、西夏に鬼弁婆羅門有り、東土に巧言を吐く、禿頭沙門あり。此れ乃ち物類冥召して世間を誑惑す等云云。論じて曰く、昔は齊朝の光統を聞き、今は本朝の六統を見る。実なるかな法華の何況するをや」等云云。秀句に云はく「代を語れば則ち像の終はり末の初め、地を尋ぬれば則ち唐の東、羯の西、人を原ぬれば則ち五濁の生、鬪争の時なり。経に云はく、猶多怨嫉況滅度後と。此の言、良に以有るなり」等云云。夫、小児に灸治を加ふれば、必ず父母をあだむ。重病の者に良薬をあたられば、定んで口に苦しうれう。在世猶しかり、乃至像末辺土をや。山に山をかさね、波に波をたゝみ、難に難を加へ、非に非をますべし。像法の中には天台一人、法華経一切経をよめり。南北これをあだみしかども、陳隋二代の聖主、眼前に是非を明らめしかば敵ついに尽きぬ。像の末に伝教一人、法華経一切経を伝説のごとく読み給へり。南都七大寺蜂起せしかども、桓武乃至嵯峨等の賢主、我と明らめ給ひしかば又事なし。今末法の始め二百余年なり。況滅度後のしるしに鬪争の序となるべきゆへに、非理を前として、濁世のしるしに、召し合はせられずして、流罪乃至寿にもおよばんとするなり。

されば日蓮が法華経の智解は天台伝教には千万が一分も及ぶ事なけれども、難を忍び慈悲のすぐれたる事はそれをもいだきぬべし。定んで天の御計らひにもあづかるべしと存ずれども、一分のしるしもなし。いよいよ重科に沈む。還って此の事を計りみれば我が身の法華経の行者にあらざるか。又諸天善神等の此の国をすて去り給へるか。かたがた疑はし。而るに、法華経の第五の巻、勸持品の二十行の偈は、日蓮だにも此の国に生まれずば、ほとをど世尊は大妄語の人、八十万億那由佉の菩薩は提婆が虚誑罪にも墮ちぬべし。経に云はく「有諸無智人、悪口罵詈訾等」「加刀杖瓦石」等云云。今の世を見るに、日蓮より外の諸僧、たれの人か法華経につけて諸人に悪口罵詈訾せられ、刀杖等を加へらるゝ者ある。日蓮なくば此の一偈の未来記は妄語となりぬ。「悪世中比丘邪智心諂曲」と。又云はく「与白衣說法為世所恭敬如六通羅漢」と。此等の経文は、今の世の念佛者・禅宗・律宗等の法師なくば、世尊は又大妄語の人。「常在大衆中、乃至向国王大臣婆羅門居士」等、今の世の僧等、日蓮を讒奏して流罪せずば此の経文むなし。又云はく「数々見擯出」等云云、日蓮法華経のゆへに度々ながされずば、数々の二字いかんがせん。此の二字は、天台・伝教もいまだよみ給はず。況んや余人をや。末法の始めのしるし、「恐怖悪世中」の金言のあふゆへに、但日蓮一人これをよめり。例せば世尊、付法蔵経に記して云はく「我が滅後一百年に、阿育大王という王あるべし」と。摩耶経に云はく「我が滅後六百年に、竜樹菩薩という人南天竺に出づべし」と。大悲経に云はく「我が滅後六十年に、末田地という者地を竜宮につくべし」と。此等皆伝記のごとくなりき。しからずば誰か仏教を信受すべき。而るに仏、恐怖悪世・然後未来世・末世法滅時・後五百歳など、正・妙の二本に正しく時を定めたまふ。当世、法華の三類

の強敵なくば誰か仏説を信受せん。日蓮なくば誰をか法華經の行者として仏語をたすけん。南三北七・七大寺等、猶像法の法華經の敵の内、何に況んや当世の禪・律・念佛者等は脱るべしや。經文に我が身普合せり。御勸氣をかほれば、いよいよ悦びをますべし。例せば小乗の菩薩の未断惑なるが願兼於業と申して、つくりたくなき罪なれども、父母等の地獄に墮ちて大苦をうくるを見て、かたのごとく其の業を造りて、願って地獄に墮ちて苦しむに同じ。苦に代はれるを悦びとするがごとし。此も又かくのごとし。当時の責めはたうべくもなけれども、未来の悪道を脱すらんとをもえば悦ぶなり。

但し、世間の疑ひといひ、自心の疑ひと申し、いかでか天扶け給はざるらん。諸天等の守護神は仏前の御誓言あり。法華經の行者にはざるになりとも、法華經の行者とがうして、早々に仏前の御誓言をとげんとこそおぼすべきに、其の義なきは我が身法華經の行者にあらざるか。此の疑ひは此の書の肝心、一期の大事なれば、処々にこれをかく上、疑ひを強くして答へをかまうべし。

季札といひし者は心のやくそくをたがへじと、王の重宝たる劍を徐君が塚にかく。王寿と云ひし人は河の水を飲みて金の鷲目を水に入れ、弘演といひし人は腹をさいて主君の肝を入れる。此等は賢人なり、恩をほうずるなるべし。況んや舍利弗・迦葉等の大聖は、二百五十戒・三千の威儀一つもかけず、見思を断じ三界を離れたる聖人なり。梵帝・諸天の導師、一切衆生の眼目なり。而るに四十余年が間、永不成仏と嫌ひすてはてられてありしが、法華經の不死の良薬をなめて、焦種の生ひ、破石の合ひ、枯木の華菓などせるがごとく、仏になるべしと許されていまだ八相をとなえず、いかでか此の經の重恩をばほうぜざらん。若しほうぜずば、彼々の賢人にもをとりにて、不知恩の畜生なるべし。毛宝が龜は、あをの恩をわすれず、昆明池の大魚は命の恩をほうぜんと明珠を夜中にさげたり。畜生すら猶恩をほうず。何に況んや大聖をや。阿難尊者は斛飯王の次男、羅睺羅尊者は淨飯王の孫なり。人中に家高き上、証果の身となって成仏ををさへられたりしに、八年の靈山の席にて、山海慧・蹈七宝華など如来の号をさづけられ給ふ。若し法華經ましまさずば、いかにいえたかく大聖なりとも、誰か恭敬したてまつるべき。夏の桀、殷の紂と申すは万乗の主、土民の歸依なり。しかれども政あしくして世をほろぼせしかば、今にわるきものゝ手本には、桀紂桀紂とこそ申せ。下賤の者、癩病の者も桀紂のごとしといわれぬれば、のられたりと腹たつなり。千二百無量の声聞は、法華經ましまさずば、誰か名をもきくべき、其の音をも習ふべき。一千の声聞、一切經を結集せりとも見る人もよもあらじ。まして此等の人々を繪像木像にあらわして本尊と仰ぐべしや。此れ偏に法華經の御力によって、一切の羅漢、歸依せられさせ給ふなるべし。諸の声聞、法華をはなれさせ給ひなば、魚の水をはなれ、猿の木をはなれ、小兒の乳をはなれ、民の王をはなれたるがごとし。いかでか法華經の行者をすて給ふべき。諸の声聞は爾前の經々にては肉眼の上に天眼・慧眼をつ。法華經にして法眼・仏眼備はれり。十方世界すら猶照見し給ふらん。何に況んや此の娑婆世界の中、法華經

の行者を知見せられざるべしや。設^{たと}ひ日蓮悪人にて、一言二言、一年二年、一劫二劫、乃至百千万億劫、此等の声聞を悪口罵詈し奉り、刀杖を加へまいらす色なりとも、法華経をだにも信仰したる行者ならばすて給ふべからず。譬へば、幼^{おさなきもの}稚の父母をのる、父母これをすつるや。梟^{きょうちよう}鳥母を食らふ、母これをすてず。破鏡父をがいす、父これにしたがふ。畜生すら猶かくのごとし。大聖法華経の行者を捨つべしや。

されば、四大声聞の領解の文に云はく「我等今、真に是声聞なり。仏道の声を以て一切をして聞かしむべし。我等今、真に阿羅漢^{あらかん}なり。諸の世間、天人・魔・梵に於て普く其の中に於て、応に供養を受くべし。世尊は大恩まします、希有の事を以て、憐愍教化して、我等を利益したまふ。無量億劫にも、誰か能く報ずる者あらん。手足をもって供給し、頭頂^{ずちよう}をもって礼敬^{らいぎよう}し、一切をもって供養すとも、皆報ずること能はじ。若しは以て頂戴し、両肩に荷負して恒沙劫に於て心を尽くして恭敬^{くぎよう}し、又美膳、無量の宝衣、及び諸の臥具、種々の湯薬を以てし、牛頭栴檀及び諸の珍宝、以て塔廟を起て、宝衣を地に布き、斯くの如き等の事、以て供養すること、恒沙劫に於てすとも、亦報ずること能はじ」等云云。

諸の声聞等は前四味の経々にいくそばくぞの呵責^{かしゃく}を蒙り、人天大会の中にして恥辱^{ちじよく}がましき事、其の数をしらず。しかれば迦葉尊者の涕泣^{かしょう}の音は、三千をひゞかし、須菩提尊者は茫然^{ぼだい}として手の一鉢をすつ。舍利弗は飯食^{ぼんじき}をはき、富楼那は画瓶^{ぶろうな}に糞を入ると嫌はる。世尊、鹿野苑にしては阿含経を讚歎し、二百五十戒を師とせよ、なんと慇懃^{おんごん}にほめさせ給ひて、今又いつのまに我が所説^{すお}をばかうはそしらせ給ふと、二言相違の失とも申しぬべし。例せば世尊、提婆達多^{たいぼだつた}を汝愚人、人の唾^{めり}を食らふと罵詈せさせ給ひしかば、毒箭^{どくせん}の胸に入るがごとくおもひて、うらみて云はく「瞿曇^{くどう}は仏陀にはあらず。我は斛飯王^{こくぼんのう}の嫡子、阿難尊者^{あなん}が兄、瞿曇が一類なり。いかにあしき事ありとも、内々教訓すべし。此等程の人天大会に、此程の大禍を現に向かつて申すもの大人仏陀の中にあるべしや。されば先々は妻のかたき、今は一座のかたき、今日よりは生々世々に大怨敵となるべし」と誓ひしぞかし。此をもって思ふに、今諸の大声聞^{もと}は本外道婆羅門の家より出でたり。又諸の外道の長者なりしかば、諸王に帰依せられ諸檀那^{だんな}にたつとまる。或は種姓高貴の人もあり、或は富福充滿のやからもあり。而るに彼々の栄官等をうちすて、慢心^{はたほこ}の幢^{ちよう}を倒して、俗服^{えじき}を脱ぎ、壊色の糞衣^{ふんね}を身にまとひ、白^{びやく}、弓^{きゆう}、箭^{せん}等をうちすて、一鉢^{こつがい}を手^てににぎり、貧人・乞丐^{びんじん}などのごとくして、世尊につき奉り、風雨を防ぐ宅もなく、身命をつぐ衣食乏少なりしありさまなるに、五天四海皆外道の弟子檀那なれば、仏すら九横の大難にあひ給ふ。所謂、提婆が大石をとばせし、阿闍世王^{あじゃせ}の醉象^{すいぞう}を放ちし、阿耆多王^{あぎた}の馬^め、婆羅門城^{ばらもん}のこんづ、せんしゃ婆羅門女^{ばらもんによ}が鉢を腹にふせし、何に況んや所化の弟子の数難申す計りなし。無量の釈子は波瑠璃王に殺され、千万の眷属^{けんじく}は醉象にふまれ、華色比丘尼^{けしきびくに}は提婆にがいせられ、迦盧提尊者^{かるだい}は馬糞^{まけん}にうづまれ、目犍尊者^{くじよう}は竹杖^{ちくじよう}にがいせらる。其上、六師同心して阿闍世^{あじゃせ}・婆斯匿王^{はしおく}等に讒奏^{ざんそう}して云は

く「瞿曇は閻浮第一の大悪人なり。彼がいたる処は、三災七難を前とす。大海の衆流を
あつめ、大山の衆木をあつめたるがごとし。瞿曇がところには、衆悪をあつめたり。所謂、
迦葉・舍利弗・目連・須菩提等なり。人身を受けたる者、忠孝を先とすべし。彼等は
瞿曇にすかされて、父母の教訓をも用ひず、家をいで、王法の宣をもそむいて山林にい
たる。一国に跡をとゞむべき者にはあらず。されば天には日月衆星変をなす、地には衆
天さかなり」などうったう。堪ふべしともおぼへざりしに、又うち添うわざわいと、
仏陀にもうちそひがたくてありしなり。人天大会の衆会の砌にて、時々呵責の音をき
ゝしかば、いかにあるべしともおぼへず、只狼狽の心のみなり。其上、大の大難の
第一なりしは、浄名經の「其れ汝に施す者は福田と名づけず、汝を供養する者は三悪道
に墮す」等云云。文の心は、仏、菴羅苑と申すところにをはせしに、梵天・帝釈・日月
・四天・三界諸天・地神・竜神等、無数恒沙の大会の中にして云はく「須菩提等の比丘
等を供養せん天人は三悪道に墮つべし」と。此等をうちきく天人、此等の声聞を供養す
べしや。詮ずるところは、仏の御言を用て、諸の二乗を殺害せさせ給ふかと思ゆ。心あ
らん人々は、仏をもうとみぬべし。されば此等の人々は、仏を供養したてまつりしついで
にこそ、わづかの身命をも扶けさせ給ひしか。されば事の心を案ずるに、四十余年の
経々のみとかれて、法華八箇年の所説なくて、御入滅ならせ給ひたらましかば、誰の人
か此等の尊者をば供養し奉るべき。現身に餓鬼道にこそをはすべけれ。

而るに四十余年の経々をば、東春の大日輪、寒氷を消滅するがごとく、無量の草露を
大風の零落するがごとく、一言一時に未顕眞実と打ちけし、大風の黒雲をまき、大虚に
満月の処するがごとく、青天に日輪の懸かり給ふがごとく、世尊法久後要当説眞実と照
らさせ給ひて、華光如来・光明如来等と舍利弗・迦葉等を赫々たる日輪、明々たる月輪
のごとく鳳文にしるし、龜鏡に浮かべられて候へばこそ、如来滅後の人天の諸檀那等
には、仏陀のごとくは仰がれ給ひしか。

水すまば、月、影ををしむべからず。風ふかば、草木なびかざるべしや。法華經の行
者あるならば、此等の聖者は大火の中をすぎても、大石の中をとをりても、とぶらわせ
給ふべし。迦葉の入定もことにこそよれ。いかにとなりぬるぞ。いぶかしとも申す
ばかりなし。後五百歳のあたらざるか。広宣流布の妄語となるべきか。日蓮が法華經の
行者ならざるか。法華經を教内と下して、別伝と称する大妄語の者をまぼり給ふべきか。
捨閉閣抛と定めて、法華經の門をとぢよ、巻をなげすてよと繋りつけて、法華堂を失へ
る者を守護し給ふべきか。仏前の誓ひはありしかども、濁世の大難のはげしさをみて
諸天下り給はざるか。日月、天にまします。須弥山いまもくづれず。海潮も増減す。四
季もかたのごとくたがはず。いかになりぬるやらんと、大疑いよいよつもり候。

又諸大菩薩、天人等のごときは、爾前の経々にして記莧をうるやうなれども、水中の
月を取らんとするがごとく、影を体とおもうがごとく、いろかたちのみあって実義もな
し。又仏の御恩も深くて深からず。世尊初成道の時はいまだ説教もなかりしに、法慧菩

薩・功德林菩薩・^{こんごうどう}金剛幢菩薩・金剛藏菩薩等な^んど申せし六十余の大菩薩、十方の諸仏の国土より、教主釈尊の御前に来たり給ひて、^{けんじゆ}賢首菩薩・^{げだつがつ}解脱月等の菩薩の請ひにをむいて十住・十行・^{えこう}十回向・十地等の法門を説き給ひき。此等の大菩薩の所説の法門は、釈尊に習ひたてまつるにあらず。十方世界の諸の梵天等も来たつて法をとく。又釈尊にならいたてまつらず。総じて華嚴会座の大菩薩・天竜等は、釈尊已前に不思議解脱に住せる大菩薩なり。釈尊の過去因位の御弟子にや有らん。十方世界の先仏の御弟子にや有らん。一代教主、始成正覚の仏の弟子にはあらず。阿含・方等・般若の時、四教を仏の説き給ひし時こそ、^漸やうやく御弟子は出来して候へ。此も又仏の自説なれども正説にはあらず。^故ゆへいかなとなれば、方等・般若の別・円二教は、華嚴經の別・円二教の義趣をいはず。彼の別・円二教は、教主釈尊の別・円二教にはあらず、法慧等の大菩薩の別・円二教なり。此等の大菩薩は、人目には仏の御弟子かとは見ゆれども、仏の御師ともいひぬべし。世尊、彼の菩薩の所説を聴聞して智発して後、重ねて方等・般若の別・円^説をとけり。色もかわらぬ華嚴經の別・円二教なり。されば此等の大菩薩は釈尊の師なり。華嚴經に此等の菩薩を^數かずへて、善知識と^説とかれしはこれなり。善知識と申すは、一向師にもあらず、一向弟子にもあらずある事なり。蔵・通二教は又、別・円の支流なり。別・円二教を^しる人、必ず蔵・通二教を^しるべし。人の師と申すは、弟子のしらぬ事を教へたるが師にては候なり。例せば、仏より前の一切の人天・外道は、二天・三仙の弟子なり。九十五種まで流派したりしかども、三仙の^{けん}見を出さず。教主釈尊もかれに習ひ伝へて、外道の弟子にてましませしが、苦行・樂行十二年の時、苦・空・無常・無我の理をさとり出だしてこそ、外道の弟子の名をば離れさせ給ひて、無師智とはなのらせ給ひしか。又、人天も大師とは仰ぎまいらせしか。されば前四味の間は教主釈尊、法慧菩薩等の御弟子なり。例せば、文殊は釈尊九代の御師と申すがごとし。つねは諸經に不説一字ととかせ給ふもこれなり。

仏御年七十二の年、^{まかだこくりょうじゆせん}摩竭提国靈鷲山と申す山にして、無量義經をとかせ給ひしに、四十余年の経々をあげて、枝葉をば其の中におさめて、四十余年未顕眞実と打ち消し給ふは此なり。此の時こそ諸大菩薩・諸天人等は、あはてゝ実義を請せんとは申せしか。無量義經にて実義とをばしき事一言ありしかども、いまだまことなし。譬へば月の出でんとして、^{かたち}其の体東山にかくれて光西山に及べども、^{つきしろ}諸人月体を見ざるがごとし。

法華經方便品の略開三顯一の時、仏略して一念三千心中の本懐を宣へ給ふ。始めの事なれば、ほとゝぎすの音を、^ねねをびれたる者の一音きゝたるがやうに、月の山の半をば出でたれども薄雲のをほへるがごとく、^幽かそかなりしを、^{しゃりほつ}舍利弗等驚きて諸天・竜神・大菩薩等をもよをして「諸天竜神等、其の數恒沙の如し、仏を求むる諸の菩薩、^{てんりんじょうおう}大數八万有り。又諸の万億国の^{きょうしん}轉輪聖王の至れる、合掌して敬心を以て、具足の道を聞かんと欲す」等とは請ぜしなり。文の心は、四味三教四十余年の間いまだきかざる法門うけ給はらんと請ぜしなり。此の文に「欲聞具足道」と申すは、大經に云はく「薩とは具足

の義に名づく」等云云。無依無得大乘四論玄義記に云はく「沙とは訳して六と云ふ。胡法こほうには六を以て具足の義と為すなり」等云云。吉蔵の疏に云はく「沙とは翻じて具足と為す」等云云。天台の玄義の八に云はく「薩とは梵語ぼんごここ此に妙と翻ずるなり」等云云。付法蔵の第十三、真言・華嚴・諸宗の元祖、本地は法雲自在王如来、迹に竜りゅうみょう猛菩薩、初地の大聖の大智度論千卷の肝心に云はく「薩とは六なり」等云云。妙法蓮華經と申すは漢語なり。月支には薩達磨分陀利伽蘇多攬と申す。善無畏三蔵の法華經の肝心真言に云はく「曩謨三曼陀沒駄南さつだるまぶんだりきやそたらん婦命普ぜんむい唵おん三身さんじん阿々あ暗惡あんなく開示かいし薩縛勃駄さるばぼだ一切いっけ枳穰曩きのお娑乞鞠毘耶さきしゅびや見けん識し々ぎやぎやのう曩のうまくさまんだぼだなん

婆縛ばば如虛らく空性くうじやう羅乞叉らきしゃ爾に離塵りじん相さう薩哩達磨さつりだるま正法しやうぽう浮陀哩迦ふんだりきや白蓮はくれん蘇駄覽そたらん惹入じやうに吽うん鑠ばん住じゆ發こく歡喜くわんぎ縛日羅ばくじら堅固けんこ羅乞らき

又また卿しやまん護ご吽うん無願むげん娑婆訶さばか決定けつじやう成就じやうじゆ」と。此の真言は南天竺の鉄塔の中の法華經の肝心の真言なり。

此の真言の中に薩哩達磨と申すは正法なり。薩と申すは正なり。正は妙なり。妙は正なり。正法華、妙法華是なり。又妙法蓮華經の上に、南無の二字ををけり。南無妙法蓮華經これなり。妙とは具足。六とは六度万行。諸の菩薩の六度万行を具足するやうをきかんとをもう。具とは十界互具。足と申すは一界に十界あれば当位に余界あり。満足の義なり。此の經一部・八卷・二十八品・六万九千三百八十四字、一々に皆妙の一字を備へて、三十二相八十種好の仏陀なり。十界に皆己界こがいの仏界を顯はす。妙楽云はく「尚仏果を具す、余果も亦然り」等云云。仏此を答へて云はく「衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」等云云。衆生と申すは舍利弗、衆生と申すは一闍提、衆生と申すは九法界。衆生無辺誓願度こ此に満足す。「我本誓願を立つ。一切の衆をして、我が如く等しくして異なること無からしめんと欲す。我が昔の願ぜし所の如き、今は已に満足しぬ」等云云。

諸大菩薩・諸天等此の法門をきひて領解して云はく「我等昔よりこのかた来、しばしば數世尊の説を聞きたてまつるに、未だ曾て是くの如き深妙の上法を聞かず」等云云。伝教大師云はく「我等昔よりこのかた来、しばしば數世尊の説を聞くとは、昔法華經の前華嚴等の大法を説くを聞けるを謂ふなり。未だ曾て是くの如き深妙の上法を聞かずと謂ふは、未だ法華經の唯一仏乗の教を聞かざるなり」等云云。華嚴・方等・般若・深密・大日等の恒河沙ごうがしゃの諸大乘經は、いまだ一代の肝心たる一念三千の大綱・骨髓たる二乗作仏・久遠実成等をいまだきかずと領解せり。